谷沢川支流・又左衛門沢

斎藤　憲一

■山行年月日:2021 年
9 月 13 日～14 日
■メンバー:斎藤憲一
■コースタイム:13 日　林道待避所 7:00～稜線 10:30/11:00～又左衛門沢 11:30～テン場 11:40
14 日　テン場 11:20～往路支流出合 11:30～稜線 14:00/14:30～林道待避所 16:00

谷沢川源流部へのアプローチとしては『サネミ坂』を 3 回利用しているが、他にも尾根越えのルートを探ったことがあった。今回はその以前偵察していたルートをつなげる事も目的の一つであり、更には谷沢川本流までの地形の偵察、そして何より生態系調査も大きな楽しみなのである。

13 日（月）

八田蟹集落の先にある常浪川に掛かる橋を渡るとすぐに、支流の御番沢川に沿って延びる林道をしばらく走り、右岸の 4 本目の沢がそれである。この沢、入渓して間もなく 8m程の直瀑があり左岸を巻かなければならないが、その滝のすぐ上が、ゴルジュの中に左俣と右俣との二俣となっている。ここを過ぎると平凡な沢になるのだが、そのまま右俣をしばらく進んで行くと、右岸の急斜面にはいくつかの崩れかかった洞穴が見えてくる。かつて何かの鉱物でも掘った後であろうか？気になることから、斜面を登って中を覗いてみるが、何のための穴なのかよくわからなかった。この右俣は下部の二俣以降は何の変化も無く、時々休憩を入れながら、人ヶ谷山の南の鞍部を目指して黙々と登っていくと、特に困難というほどの藪漕ぎもなく、いつの間にか顕著な稜線に到達する。

ゆっくり休憩した後、稜線からしばらくは比較的なだらかな東の支流を下って行くが、中間部付近まで来ると、4m程の手がかりの無いナメ滝が二つ続いて現れる。両岸手掛かりのない岩から草付きとなっていることから、巻き下りはできないために、滝下が安定していることを願いながらも意を決し、十分に注意して滑り降りる。沢はその後も変化は無く、順調に下って、昼前には又左衛門沢に降り立つことができた。

まずは谷沢川本流まで偵察しようかと思い、又左衛門沢を下って行くと、わずか 5 分程で 15mの滝が現れる。ここを下ってしまうと、登り返しに時間が掛かりそうなので、残念だが本流までの偵察は諦め、テン場を探しに上部へ向かう。この付近は左右の岸が迫っていて適地は少ないことから、手頃な河原を幕場としてツェルトを張る。僅かな雨でも水に浸かってしまいそうな幕場だが、天候は申し分ないことから、流木を集めて焚き火の準備をし、いよいよ生態系調査である。幕場のすぐ上からのポイントごとに糸を垂ら

又左衛門沢の一夜の宿

すと、すぐに魚の生存を確認でき、しばらく釣り上がって結構な数を釣り上げたが、2 匹だけを確保して調査を終了とする。幕場に戻って焚き火を燃やし、魚をかざしながらのんびりと夕食をとり、渓中の狭い星空を眺めながら、一人の静かで贅沢な夜を過ごす。

14 日（火）

ゆっくりと起き出し、モーニングコーヒーに続いての朝食の後は、Co650 付近の支流まで空身で偵察するが、ここから上部は流れも緩やかで、沢が開けてくるようである。幕場はこの辺りから上部で探した方が良いかもしれない。

幕場まで戻り、一夜の宿をたたんで往路の支流を登り返して行くが、中間部の 4m滝二つは下降の際に思ったとおり、登り返すにも手掛かりが無く、フリクションも困難な傾斜のため、何度もトライして、滑り落ちるギリギリで本当に苦労しながら、ようやくの思いで乗り越えることができた。次に来るときには、滝を下る際にフィックスでもしておいた方が良いのかな？　その後は稜線の乗越目指して、下ってきた沢を登り返していたのだが、おそらく上部の支流分岐で間違えてしまったようで、稜線間近になって往路の時に付けてきた赤布を見失ったために、到達した尾根からそのまま乗越して西側の沢を下降していく。しかしながらというか、やっぱりというべきか、その下った沢が、実は左俣であったということを、右俣と出合ってから気が付くという失態をまたしてもやってしまったことは、反省である。なおゴルジュの中で出合う左俣からは、ブッシュ伝いから往路の際に巻いた地点に戻ることができたし、左俣そのものも特に困難も無く、右俣同様に変化のほとんど無い沢であったことは幸いであった。

又左衛門沢中流域の渓相